

## 孤立した一個の日本的生理として

五月八日(土) 午後八時。

乗船口のゲートが開かれるのを、今か今かと待ちながら、ゲート脇の通路や階段に座り込んでひしめきあう中国人たちに紛れて、僕はいる。夜の闇に押し包まれた乏しい明かりの下だ。

一見無秩序にも見える群衆の中にも、その中に入って初めて分かるお互いの了解というものはあるものだ。ゲートから伸びてくる一本の行列というものが確かにある。問題はその行列の外に座り込んで、行列を横方向に拡散させる連中のことだ。あるいはあとからやって来て、知らぬふりをして前の方に進んでいこうとするズルい奴らのことだ。ズルい奴らが行列を無視しようとするたびに、微かに舌うちするような感情のざわめきが伝わってくる。そんなことが幾度も重なり、感情はやがてどよめきのような波になり、無法者を実力で阻止しようと、正義の者は立ち上がる。

しかし正義は感情のどよめきを阻止することはできない。やがて服務員が現れて改札の準備を始めると、行列の外に座り込んでいた人々は行列に飛び込み、せきを切ったように人々を列の中に閉じ込めていた正義は感情の津波に押し流されてしまうのだ。殺到とはまさにこの瞬間のことを言うのだろう。秩序が感情のどよめきに押し流されるとき。

ベッドは全て予約されているのに、どうしてこういうことになってしまふのか、僕は理解できない。しかしただひとつ理解できることは、どんな先を越されることが無性に腹立たしいということだ。群衆の感情は感染する。僕には免疫はない。いつのまにか群衆の一員になってしまっている自分を発見する。

ようやく改札をすませて、ほっとする間もなく、今度は船内の改札へと人々は殺到する。售票処で購入したチケットを船内の改札で乗船票と交換しなければならぬのだ。そこで初めてベッドの指定を受けるのだった。

カウンターに群がる人々のうしろについていると、あっちへ行けとか、そっちへ行けとか、服務員は殺到する乗客にどなり散らす。わけが分からないまま、中国人たちについてあっちへ行ったり、そっちへ行ったり、階段を登ったり、降りたりする。チケットの等級によって船内改札の場所が違うらしいのだが、今ついて行く中国人たちの目指す所が僕のチケットの場所と同じかどうかさえも分かってはいないのだ。ただ、何故かは分からないが、夢中だった。ようやくあるカウンターにたどり着いて、群がる中国人たちと同じように服務員の目前にチケットを差し示したのだった。いろいろな方向から差し出されるチケットを服務員は一枚ずつ確認し、

乗船票と交換する。しばらくしてようやく僕のチケットが取り上げられて、ようやく乗船票が差し出される。

船室は二段ベッドが三つずつ両側に並び、一二人部屋になっていた。指定された上段のベッドに腰を落ち着けて、ようやくほっとひと息。

さすがに長江を渡る船だけあって大きな客船だ。杭州―蘇州の川船とは違う。船は四層になっていて、おそらく数百人の乗客が乗っているだろう。

それぞれのベッドを確保して、給湯所でお茶を入れて、船内でのそれぞれの生活が整えられようとする頃に、船はゆっくりと岸壁を離れた。

中国南部沿海部における約一〇日間の旅に区切りをつけて、次の目的地、武漢までは二泊三日の船旅だ。

これからいよいよ沿海郡の大都市南京を離れて、中国大陸の内陸部の方に入っていくのだと思うと、心細くもあり、期待もあり、少々うんざりする気分もあった。

何はともあれ、こうして船室の四等ベッドとはいえとても快速な空間を確保して、あとはゆつくりと眠るだけという状態で、僕は今朝の切迫した自分の姿を、むしろほほえましいもののように振り返るのだった。

※

今朝、再び南京港客運駅の售票処前に立ったとき、僕はまるで敵討ちに出向くかのような心境だった。それでもつとめて平静を装いながら窓口へと向かったのだ。

「今天、到漢口、四等（チンテン、タオハンコウ、ストーン）」

とここへ来る途中、幾度となく繰り返した言葉を投げつける。

「×××××」

何事かを告げながら、窓口の女性は隣の窓口を指し示す。

「ダメか…」

と心のどこかではあきらめながら、気をとりなおして隣の窓口に向かう。

「今天、到漢口、四等」

六〇元の紙幣を突き出ししながら、祈るように窓口の女性に告げる。

「×××××？」

窓口の女性は何事かを尋ねるのだが、その意味が僕には分からない。思わず口ごもってしまうその瞬間、思いついて、

「对、对（そうだ、そうだ）」

と答えた。

まごついて外国人だとバレるよりは、分からないながらそのように答えた方がいいと考えたのだ。

少し不審そうな表情を見せながらも、窓口の女性はチケットを差し出した。

奪うように、チケットを受け取ったのだった。

中山礪頭の拉面屋で朝食をとる。

「拉面（ラーメン）」

と注文しながら長椅子に腰を下ろすと、

「××××？」

主人は何かを尋ねる。

售票処でのやり取りを思い出して、

「対、対」

と答えた。

主人は心得たように味噌のようなものをスープに入れた。それを入れてもいいかどうかを聞いていたのだ。

出されたラーメンは飛び上がるほど辛かった。

万能の方法ではない。

少し水が流れ始めたという気がする。

うまくは言えないけれども、約一〇日間中国を旅行してきて、その間に少しずつ溜ってきた澱みのようなものが、今日は少し流れているという気がしたのだった。

船のチケット一枚のことなのだから、たわいのない話だけでも、昨日は一日中そのことが頭のどこかにひっかかっていたのだから、そこからすべての運の悪さも始まったような気がして、僕は少し心軽く、南京師範大学の招待所へと戻ったのだった。

途中、蘇州の南林飯店を思わせる豪華な南京飯店の銀行で、一万円をFECに交換した。少し裕福になったような気分で南京飯店の門を出ると、くたびれた服装をした中年のおばさんがためらいがちに声をかけてきた。しばらく意味が分からなかったのだけれども、しつこく繰り返す言葉を聞いていると、どうやら「チェンジマネー」と言っているらしい。言われるままに、二〇〇元（FEC）を二五〇元（人民幣）に交換したのだった。

（先に報告した通常のレートよりもずいぶん安いと思われるかもしれないが、そのときの僕は交換レートに関する知識もなくて、逆にお金が増えて得をしたような気がしていた。それに人民幣がなくて困っていたので、

喜んで交換したのだった。」

学生たちが行き交う師範大学のキャンパスを通過して、留学生招待所に戻り、ひと息ついたあと、フロントに荷物を預けて、チェックアウトした。

「我想寄存这个行李（荷物を預かって下さい）」

心なしか、中国語もなめらかに口をついて出るようだった。

新街で九路のバスに乗り、中山陵へ。

南京城の東城門にあたる中山門を通り抜けると、すぐに紫金山のふもとであり、バスは蛇行しながら山道を登っていく。

終点に着くと、ロータリーには白い柱と青い瓦屋根の大きな参道門がそびえて、中華民国建国の父、孫文の墓にお参りをする人々にぎわっていた。

石畳の坂道を延々と登っていく。坂道はやがて階段になり、白壁に青い瓦屋根の建物を越えて延々と続く。

あちらこちらで記念写真を撮りあう中国人たちを尻目に、どんどん登っていくと、同じく白壁に青い瓦屋根の入場門があり、入場料は五元。手荷物を預けて入場する。

最後の階段を登り切ると、墓室のある建物の前には行列ができていた。見ると、人々は靴の上から透明のビニール袋を履いている。後尾の受付でビニール袋を受け取って履くのだ。土足で孫文の墓をけがさないようにということなのだろうか。ともかく、ビニール袋を履いて行列に並んでいると、いやでも神聖な場所に入っていくのだという気分が高まってくる。

行列は言葉少なく、少しずつ進んでいった。

墓室の内部は直径三メートルほどの円形の墓になっていて、その中心に据え付けられた大理石の棺に孫文の臥像が安置されていた。一九二九年に北京から移されたという孫文の遺体はその下に眠っているのだろう。行列は言葉少なく、凝固した沈黙とも言えるべき円形の墓をゆっくりとひとまわりして、建物の外へ。

何か物思いを置き忘れたかのような気がして、僕は墓室を振り返った。

墓室のある建物から見下ろすと紫金山の斜面を利用して建設された中山陵はとてつもないスケールだということが実感できる。両脇に緑の木々を従えて、延々と石畳の階段が続く。バス停のある白い柱と青い瓦屋根の参道門は豆つぶのような遠景だ。

ゆっくりと石階段を降りていく。

中国の各地からの観光客らしい人々や若いカップル、遠足がてらにやってくるような子供たちとすれ違いながら、僕は微かな物思いを抱いていた。

参道門に近い石畳の坂道には飲物やお土産物の露店が並び、あちこちに雨花石が売られていた。

まさに血しぶくような中国近代史の原点的な肖像としての孫文の墓に雨花石の赤。それは血のようでもあり、血の涙のようでもある。

中山陵、それは革命家孫文の墓である以上に中国近代史の象徴なのだ。それは沈黙としての歴史に刻まれた証言であり、僕たちが自らの現在を測定する道標でもある。

「僕たち？」

と僕はとまどいながら自らに問い返す。僕はもしかしたら僕たちの中には入っていないのではないかと。

中山陵から明孝陵へ、山道を歩いた。

誰もいない静かな山道を歩いていると、自分がどこにいるのか分からなくなる。ここが日本からはるか離れた南京の郊外だということがとても思確なことのように思えてくる。

樹木のざわめき、土の臭い。

樹木のざわめき、土の臭い。

そのただ中にやがて紛れていくことを、僕の身体は求めている。やがて最後の物思いも樹木のざわめきに紛れて、静かに土に帰っていく。死は、おそらくそのようなどこかなつかしいような出来事だという気がする。それは生に対立しない。むしろ生の母体なのだ。

このような感じ方が僕の中の日本によるものかどうか、僕は分からない。だけれども、もしもその感覚を日本と呼ぶとして、僕は自分がどうしようもなく日本でありながら、日本であることに寝そべってしまうことには違和を一方では感じる。またこのような感じ方は決して一般的に通ずるものではない。

生と死をめぐる感じ方について、日本と中国はまったく違うという気がする。それは中国旅行を続けてきて、その生活に微かに漂う臭いとか兆しとして感じていることなので、うまく説明する言葉はないのだけれども。

漠然とした物思いに浸りながら山道を歩いて、三〇分ほどで明孝陵の裏門に至る。

明孝陵は明の開宗、朱元璋の墓で、一三八三年に建立された。その後太平天国によって破壊されたのち、清代に修復されたというが、昔日の威容はない。

入場門に入って、石畳の道を歩いていくと、陵門の建物があり、それを

抜けてさらに進んでいくと、いかにも年月にさらされたという印象の享殿がそびえている。

石畳のすきまにも享殿の壁にも草が生い茂り、静かだった。ひっそりとした広場のベンチに腰を下ろして、青年がひとり本を読んでいた。

だが、規模は少し小さいけれども、明孝陵は中山陵と同じ構造をもっている。むしろ中山陵は明孝陵をはっきりと意識してつくられたかのようだ。朱元璋が明の開宗であるように、孫文は中華民国の開宗だと言えるのかもしれない。天命思想に基づく儀式は行われなかったにせよ、孫文の墓をそのように擬することによって時の支配は民衆の心に孫文という記憶を刻み込もうとしたのかもしれない。もしかしたら中国人たちの皮膚感覚としては朱元璋も孫文も変わらないのかもしれない。だが孫文は生きている。

孫文はつねに中国近代史の原点として、回収される。中山陵は中国近代史の後継としての共産党支配を正当化するための広報機関として作動する。沈黙の組織者、あるいはその不動の原点としての孫文は支配の意味をその根底において支え、また供給するのだ。だからまた、孫文の墓はいかに国父とはいえ、あのように巨大な建築物でなければならないのだ。

明孝陵前でジュースを飲みながら、路線バスを待っていた。

バス停には同じようにバスを待つ人が数人いたので、ここで待っていれば間違いないだろうと思ったのだが、いつまで待っても路線バスは来ない。あきらめてちようど通りかかって呼び込みを連呼するミニバスに乗り込んだ。南京市街の東入口、中山門まで、一二元。

中山門は要塞のような中華門とは違って、普通の石造りのアーチ型の門だった。

中山門付近の食料品・雑貨店で船旅のためにバナナを買う。

それから南京博物館をひとまわりし、石器時代から現代にまで至る歴史の堆積に圧倒されて、思考停止。

だっ広い明故宫遺址でひと息をつく。ここは明朝が北京に遷都するまでの皇城跡なのだけれども、今はまだ再建途中といった感じで、ここに建築材料が散らばっていたりする。

まだ置き場所を定められてはいないベンチが並べてあったので、腰を下ろして、煙草を吸った。視界のずっと向こうには一部完成した明故宫の建物の茶色い屋根が見えた。ここもやがては一大観光地として変貌するのだろうか。

バスに乗って中心地へと戻り、梅園新村へ。梅園新村は、かつて抗日統一戦線結成のために共産党と国民党の代表が会議を重ねた所。

大通りのにぎわいを離れて、狭い裏通りを入っていく。背の低いレンガ造りの家々が並び、地道には水たまりができていた。僕の持っている市街地図ではだいたいの場所しか分からないので、裏道をあっちへ行ったりこっちへ来たり。どうしても見つからないのであきらめて、賑やかな市場になっている通りを抜けて大通りへ出た。

すでに午後五時に近い時間になっていたので、もうひとつの予定、太平天国歴史博物館はあきらめて、師範大学の招待所へ戻ることにした。

少し疲れて、バス停にたどり着く。

歩道では男が大きな竹のザルにザリガニを売っていた。二、三人の女性がザリガニを物色していた。二ザルほどのザリガニはあらかた売れて、男は売れ残ったザリガニの頭を取っていた。

最寄りのバス停でバスを降りる。(昨日はずいぶん離れたバス路線をとっていた。たったの二日間ですいぶんとこの街にもなじんだような気がする。)

帰り道、サンドイッチ風やケーキ風のパンを並べることきれいな店があったので、二個一元のパンを買い、公園の階段に腰を下ろして食べた。

目の前では、幼児とその父親がボール遊びをしていた。

夕暮れ前のひととき。

留学生招待所から荷物を受け出して、もう慣れてしまった客運站へと向かう。

中山礪頭でバスを降りて、長江沿いの道を客運站へ。歩いていると路地の入口から女が手招きするのが見えた。そちらの方へ行ってみると屋台の食堂なのだった。

食堂といっても、建物の陰にボロボロのテーブルが二脚と丸椅子がいくつか置いてあるだけ。大きな鍋には家でこしらえてきたのだろう、おかずが二種類。船客相手に、家族でやっているらしい。二菜一汁の定食で二元。ごはんはどんぶり一杯。

さっきパンを食べたばかりなのだけれども、中途半端な時間だったので、ちゃんとした(?)メシを食べておこうと思って腰を下ろした。

食べ終わった客の食器を、娘はどこかへ運んでいく。いったいどこで洗うのだろう。ちゃんと洗っているのだろうか、ふとクエスチョンマークが頭を過ぎる。だけど中国人が食べているものを食べて悪いはずがない。黙々と、疑問を打ち消しながら、食べた。

女は道を行く人ごとに「二元だよ、三元だよ」と声をかけている。

このようにして、いつの時代も、中国人たちは生きてきたのかもしれないと、ふと僕は思う。

夕闇はゆっくりと足元から立ち上ってきた。

※

その夜は一日歩きまわった疲れもあつて、早々に寝た。

次の日はベッドに横たわり、一日中、吉川幸次郎の『陶淵明伝』を読んでいた。中山門で買い込んだバナナと船中で買った梨を食べながら。ときどき読書に飽きると、デッキに出て、どこまでも単調な長江を眺めた。

やがて二日目の夜になり、船内アナウンスが夕食の準備ができたことを告げる。さすがに腹が減ってきたので、階下にある食堂へと降りていった。

食堂内には人々がひしめきあい、食券売場の前には行列ができていた。思わずたじろぎそうになる混雑だったが、それに負けてはメシを食べないので、行列の後尾についた。

食券売場横に掲げられた黒板にはメニューが走り書きしてあつた。そのほとんどはどんな料理か見当もつかないし、読み方も分からないので、僕はどうかやら読める料理をひとつ選んだのだった。

一〇分ほど行列に並んでようやく自分の番になり、窓口を覗き込んで料理名を告げた。

その瞬間、服務員の女性はふいと横を向いた。何を見ているのかなと、しばらく待っていると、突然彼女はこちらに向き直って、大声でどなり始めた。「とつとどこかへ失せろ！」というようなジェスチャーとともに。けんもほろろ。

僕の告げた料理名がうまく伝わらなくて、わけの分からない奴は追いつ返すに限るとでも思ったのだろうか。あまりの忙しさに機嫌が悪かったのだろうか。ともかく僕はそのような女性の剣幕に出会ったことはなかったもので、いつべんに萎縮してしまったのだ。メモ用紙に料理名を書いて伝えるという方法も思いつかないまま、そそくさと船室に戻って、空腹を抱えながら、ベッドに横になった。

同室の人の中には大きなマグカップでインスタントラーメンを食べている人がいた。また、広口のビンにお茶を入れて飲んでた。

（あのマグカップか広口のビンでもあれば、と僕は思ったのだった。それは中国人たちの泥臭い旅の小道具だけれども、中国の風土にあつてはとても合理的で便利なものなのだ。僕は旅のために水筒を持っていて、乗船前、お茶売りのおばさんから水筒一杯のお茶を二角で買っていたのだけれども、水筒としてしか使えない水筒は中国人たちの小道具に比べると



とても不便なものだった。」

彼らは僕が日本人であるとは知らない。

おそらく無口で変な奴とでも思っただろう。なにしろ船旅の間中、同室の人たちとひと言も言葉を交わさなかったのだから。

夜の一〇時頃、九江という港に到着した。船はしばらく停泊し、物売りのおばさんたちが乗り込んできた。

「サンガーデ、イークアイ、サンガーデ、イークアイ」

と調子よく連呼しながら、カゴ一杯のゆで卵を売り歩いた。

通り過ぎていくおばさんを追いかけて、ゆで卵を買い、デッキでむさぼるようにして三個をいっぺんに食べてしまった。

夜の栈橋で、何人かの男たちが荷の積み下ろしをしていた。

薄明かりの中を、夜の風が静かに流れていた。

確か、陶淵明の故郷はこの近くだったはず。

僕は少し疲れ始めていた。中国人たちと関わりになるのがうつつとうしかった。彼らの体臭、彼らの動作、彼らの習慣、感覚を逆なでるような中国語の語感。彼らの間をそこはかとなくただよう空気。そういった一切、いわば皮膚感覚でしか感じられない生理的なもの、生理的な中国というものがうつつとうしかった。

それはもしかしたらパックの観光旅行では感じることもない感覚なのかもしれない。いわば受け皿があり、それに当てはまって観光するという旅。しかも複数ならば『僕らの世界』をそのまま持ち運んでいくようなものだ。中国四〇〇〇年の歴史は葛藤なく偉大なものだと感じ取れるだろう。

もちろん僕のこの感覚は郷愁でもある。しばらく離れている日本の、その生理的な空気とでもいうものに郷愁しているのだ。僕という孤立した日本の生理が中国という似ている点もあるけれどもまったく異なる点も多い生理のただ中に置かれて、葛藤しているのだ。

葛藤しつつ、疲労を蓄積してきたのだと思う。

船室で、ベッドに横たわって、僕は『陶淵明伝』に没頭していた。中国を知りたいためではなく、日本の生理に触れたかったのだ、おそらくは。